

## 批評性の介入によって没入を破壊する

高山明(演出家、東京藝術大学)

今自分の周りで起きていることを少し紹介すると、2020年のちょうど新型コロナの感染拡大が始まった頃は、どこの劇場や美術館もみんな、オンラインの作品を何とかつくってほしいと言い、僕も、アテネとニューヨークにあるオナシス文化センターのためにオンラインの作品をつくりましたが、どうもその手応えがなかったんです。その後もフランクフルトで23キロぐらい歩く長いツアーを遠隔でつくりました。23キロ歩くわけですからなかなか大変なツアーなんです、遠隔でつくっている身としては、やはり全然手応えがないんです。その後にブリュッセルで《マクドナルドラジオ大学》という、やはりすべて遠隔でしたが、Zoomで難民の方とインタビューをしたりして、一緒に授業をつくって、最終的にブリュッセルのマクドナルド——正確にはマクドナルドの前の広場——で授業をやるというプロジェクトをやり、それはわりと手応えがありました。

それが最近では、話が来ても、いま日本からなかなか出られないという、キャンセルになることが圧倒的に多くなってきている。ワクチンの広がり具合もだいたいコントロールできてきていると思っている国々からしたら、来れないんだったらいいです。劇場もしくは美術館の流れとしても、今までは集まれなかったからオンラインに一気に振れて、今度は集まれるようになったら、集まるということにほとんど反動的な形で戻っていったというのが僕の印象です。

なので自分にとって、今回の共集性というテーマは、オンラインも実際に集まることも、どちらもありだとして、その問題点や課題や可能性をもう一度考えていこうという、とても良い機会になっていますし、今こういうことを考えることが非常に重要だと思います。そうでないと、二者択一の議論になってしまふ。それを避けるためにも、非常に貴重な時間だというふうに思っています。

先ほど岩城京子さんがティム・エッチェルスの言葉を引用して、「最高の演劇においては、鑑賞者はひとりであり、かつ同時にみんなである」というお話がありましたが、随分うまいこと言うなと感心をしました。というのも、自分が演劇を始めたきっかけは、ドイツにいた時に、ある舞台作品を見た時の、観客としての自分の身体感覚の変化でした。その時に観たのは、ピーター・ブルックという演出家がつくった『ザ・マン・フー』という『妻を帽子とまちがえた男』というオリ

バー・サックスの医療エッセイを、色々なワークショップをしながら舞台化したものだったんです。その時は僕は、演劇なんかまったくやっていませんでしたから、舞台がそこにあって、自分はひとりで見ている。とても集中してるんだけど、別に舞台に没入して、我を忘れているわけではないんです。周りにお客さんがいることも把握できている。だから、ひとりなんだけれども、みんなと一緒に見ているという状況も、これ以上ないというぐらい、冷めて自覚しているような身体感覚、その意識の状態が訪れました。僕はそれにもすごく感激して、こういう体験が演劇で可能なんだと、それを奇跡だと感じて、ああ、これだったら一生かけてもいいなと思いました。シュトゥットガルトで『ザ・マン・フー』を観たその晩に、ピーター・ブルックが拠点としているパリに夜行列車で行ったところから、自分の演劇活動が始まりました。なので、劇場に奇跡を見に行くということは、先ほどのティム・エッチェルスの言葉、ひとりでありながら、同時にみんなでもあるという奇跡のような瞬間を1回体験したからだったんです。ただその後、そういう体験があったかという、非常に少ない。つまりいい舞台、そういう奇跡的な体験というのはなかなかない、というのが正直なところなんです。だから自分がつくり手として、少しでもそういう体験をしてもらえるようなことができたかなと思って、いまだに試行錯誤を繰り返している状況です。ブルックの『ザ・マン・フー』を観ている時に、ひとりでありみんなであり、という状況を最も感じたのは、舞台がそこにあるんだけど、舞台に僕は飲み込まれてない、そうすると、舞台と自分との間にあるその空気を感じたような瞬間があったことです。その空気を、実は僕の隣のお客さんも、その隣のお客さんも、みんな体験している。普段空気というのは——空気のような存在などという表現があるように——ないものなんですよ。それが異化されて、そこに出現してしまう。それを感知してしまう状況に、身体の状態に僕がなった。しかも、おそらく観客全員がそういう感覚になってるという共感覚を、その時持ったわけです。それが僕にとっては非常に大きくて、その後の活動も、舞台もしくは鑑賞物と、自分の間にある空気を感じるにはどうすればいいのか。ひとりで感じる時もあるし、多くの人と共に体験する時もある。その違いは何なんだろうとか、あるいは空気を体験してもらうためには、演劇の



バイロイト祝祭劇場 撮影：高山明

条件として何が必要なんだろうというのが、僕のテーマになります。ですから先ほどの岩城さんの議論だと、没入でも異化でもない、あるいは没入だけでも異化だけでもないという状況、そういう体験をしたことが、自分の演劇を始めた初心になります。ですから、非常に重要な議論だなと思いました。

その後ちょうど演劇を始めた頃に体験した話を思い出したので、紹介したいと思います。演劇を始めてまだ全然素人みたいな時に、アメリカ人の音楽家と一緒にコラボレーションした時がありました。彼はサンフランシスコから来ていて、麻薬文化の申し子のような人でした。ゲリー・シュナイダーという詩人で、公演の前に、いい考えを思いついたと僕のところへ興奮しながらやって来て、「観客にマジックマッシュルームを食べさせてしまえば、すごくいい体験できる」と言いました。僕はその時、確かにそれはいい手だなと思い、否定ができなかったんです。観客の身体感覚や脳の構造が変わってしまうと、それがリアルだろうがデジタルだろうが、1回きりの貴重な体験になります。没入感どころか、もう完全にいっちゃった体験が成立します。そのためにマジックマッシュルームを使うというのを、どうして否定できるんだろうか。それは、その後の僕の問いになりました。

もうひとつ、薬で思い出したことがあります。ワーグナーのオペラを観ると、特にドイツでは、もう陶酔感があまりにすごくて、麻薬をやっているような感じだと思ふことがあります。バイロイト祝祭劇場というワーグナーがつくった劇場は、そういう麻薬を観客に飲ませるための、つまり没入させる装置になってるんです。そのためにあらゆることが工夫されています。例えば通路や客席も非常に狭くて、1回入ったらもう途中では出られない。オーケストラピットが非常に深く、地の底のようなところがあるので、楽団は見えない。そこから湧き上がってくるような音楽に包まれて、オーケス

トラピットが邪魔しない舞台に没入する。そういう体験をつくるアーキテクチャー＝装置になっています。その中で2時間、3時間と麻薬を体験するんです。しかも、みんな観劇する前にワインやビールを飲んでいるので、少し酔いが回ったところで、その陶酔体験、没入感を味わうわけです。もしも僕が観劇前のバーの店員か何かに扮して、利尿薬をワインやビールに混ぜたら、たぶん公演がぶっ壊れます。というのも、劇場があまりに狭すぎて——つまりそれは「舞台が始まったらあなたは立ってはいけない」「出ていってはいけない」というアーキテクチャー的なメッセージなんですから——そういうところでひとり、手洗いに立とうものなら、全員立たなければいけない。次から次へとトイレに立ったら、ひとつになった観客、あるいは麻酔、麻薬で、陶酔して没入して同化している、ひとつになったお客さんは、おそらくバラバラになるでしょう。

薬関係で、もうひとつ最後に付け加えると、今後、VRなど様々なものが出てくると思いますが、今は幸か不幸か、器具が没入を邪魔していますよね。非常に重いし、あんなものをつけて1時間とか見ていると首が痛くなってしまふ。それもたぶん10年、20年、30年と経てば、タブレット1個で、これを飲めば没入できますというようになっていくかもしれません。ひょっとしたらもう、道具が何もなくとも、タブレットを飲めばワーグナーの『ニーベルングの指環』を3時間体験できますというような、つまり観客の身体、そこで体験されるものがすべてになるかもしれません。そんな時に、我々はどうやって批評性を介入させて、その没入を壊していくことができるのか、おそらく未来の演劇では没入でないひとつのあり方が、求められるのではないかと、お話を伺っていて思いました。